

## コロナに立ち向かう際に、人々はなぜ憎しみ合うか ----なぜ人々は、人ではないものになるか

2020年の始めの際に、コロナウィルスが世界範囲で爆発的に流行した。この大災難において、国家、民族、信仰にかかわらず、無数の生命が疫病に苦しみ、命を失った。

1月、自分は日本の東北地方にある国立大学で勉強をしていた。学期末に当たって、まもなくの休みを期待し、中国に帰国して、家族と一緒に旧暦春節（中国の一番盛大な祝日）を迎えることを計画していた。しかし、春節に先んじて来たのはコロナであった。コロナの爆発的流行より、中国は武漢市をロックダウンして、人々に家に閉じこもる事を、要求した。そのような状況で、帰国することは危険であり、不可能になった。そのため、自分は日本に残って、一人で2020年の春節を過ごした。

この特別な春節に、私は中国の億万の同胞と同じように、歓楽の気分を一切感じられなかった。憂鬱な気持ちを抑えながら、コロナに関するニュースを読み続けていた。その際に、自分は初めて、同胞という言葉の意味を実感した。自分はまだ安全な日本にいるが、ニュース、友達との連絡を通して、中国にいる人々の恐怖、無力感、不安を、身をもってしっかりと共感した。

しかし、インターネットの情報、ニュースを通して、自分はだんだん疫病自体より、もっと悲しむべきことに気づいた。人類全体の敵に立ち向かう時、すべての人が大同団結して、お互いに支え合って、世界を救うことを期待したが、現実はこの方向になっていないようである。コロナが蔓延する中、人間はそれぞれの身分、立場、認識によって、グループを分け、お互いに差別をし、憎しみ、罵り合うことが大規模に起きている。例えば、中国の武漢市で感染爆発が起きた際、武漢市の人々は他の地域の人にもまるで犯罪者のように見なされていた。武漢市、そして湖北省から実家に帰省する人々は、隣人たちから疫病神のように見做され、罵られている。外地に旅行していた武漢市民たちは、都市ロックダウンのせいで、武漢に戻れなくなった。またホテルに拒絶され、泊まる場所を見つけられない状況になった。中国国内だけではなく、疫病が国際的に拡大した時、中国人、さらにアジアの人々も同様に、他の国々の人々から差別された。

直接的な差別のほかに、ネット上で異なった考え方を持つ者に対する攻撃も激しくなっている。都市封鎖、休業化すべきであるか、安全と自由はどちらが重要であるか、政府の行動を応援すべきかどうか。このようないろんな具体的な問題をめぐって、人々は立場を分けて、それぞれが意見を主張し、全力で攻撃し合っていた。各国政府もお互いに責任転嫁するため、世論を扇動することにやっきになって務めている。このようなことに、多くの人はもう見飽きたのではないだろうか。

そして、四月になると、コロナはだんだん日本にも拡大し始めた。東北大学もキャンパスをロックダウンした。登校もできないし、自分の研究もあまり進んでいない時、このようなニュース、世論ばかり読んでいて、本当にうんざりしていた。

ある日の午後、自分は家のそばの広瀬川の河原まで散歩に出かけた。桜は半分散り落ちたものの、新緑が萌し、生き活きとした生命力を示していた。また河原で野球をしている子供たちも、元気満々に声を上げ、走っていた。

そんな風景を目にして、自分の気持ちはスッとして、明るくなった。自分もその瞬間、国どうしの喧嘩、政治立場の衝突よりも、草木の芽生え、遊びまわる子供の姿など、生命力の溢れたもののほうが、より永遠の価値をもつ、と感じた。なぜ人々は、この生気に満ちている「命」の価値を無視して、立場、政治の問題ばかりをめぐって喧嘩をしているの

だろうか。

このような問題において、自分はウィルスの起源、責任者は誰か、政府はどのような対策を取るべき、というような議論に立ち入る気はない。そもそも、それは立場の問題ではなく、純粹客観的な科学事実に基づいて判断すべきことである。自分は、微生物学、衛生学の専門知識がほとんどないので、その議論を避けたい。

自分が非常に気になるのは、人々が共にウィルスに襲われる時、なぜお互い理解することができずに、逆に憎しみ合うことが発生したのかということである。

東アジアに共通している文化伝統としての儒教は、誰もが「惻隱の心」を持っている、と考える。「惻隱の心」を持つ以上、人間は苦しんでいる人を見るなら、誰でも相手の苦痛を共感して、助けようと思うはずなのに、コロナが猛威を振るう現在、なぜ、この普遍的な惻隱の心が発揮せず、逆に、お互いに対立し、攻撃することが始まったのであろうか。人々が武漢人、或はほかの他者を攻撃する際に、なぜ相手の恐怖、無力、助けてほしいという気持ちを共感できないのであろうか。

儒教の理想として、普遍的な「惻隱の心」から、人々が天人万物と共感して、天人一体、天下大同の理想世界が構築できることが、説かれている。この理想は美しいが、脆いかな。残念ながら、人類どうしの共感、いつでも実現できるわけではない。

それでは、「惻隱の心」の発動を妨げたのは何だろうか。中国の学者陳立勝先生は、儒教の万物一体論を議論する際に、面白い一点を指摘した。人間は、目の前で殺されている動物を憐むが、遠方の人間の苦痛をしばしば無視している。それは、別にその人が人間より、動物の方を愛しているわけではない。ただ、目の前の動物に対して、人はその姿を見て、叫び声を聞くことで、その生気に満ちている「命」を実感できる。その生き生きしている「命」が目の前で消えてしまうなら、誰でも「命」の価値を感じる事が出来る。それに対して、遠方の人に対してはある程度、概念的なイメージしか捉えられないので、相手の苦痛が頭の中で意識として理解できても、体で共感できない。すなわち、人間の「惻隱の心」、或は共感力は、生気に満ちている「命」に発揮できるが、概念的、ドライな関係の他者には発揮しにくい。

もしネットをよく使うなら、もっと実感できるかもしれない。日常生活において、友達が自分と違う政治意見、立場を持っていても、あまり喧嘩、絶交になることにはならないであろう。しかし、ネット上の討論なら、本当に些細な違いであっても、非常に下品な言葉で相手と罵り合うことがよくある。私たちは寛容的に身の回りの友達と付き合わせるのに、ネット上では違う意見を持つ者を絶対許さない。それはなぜであろうか。

2012年、釣魚島（尖閣諸島）の所属をめぐる、中国と日本には大きな衝突が起きた。その時、自分は中国の大学で日本語を勉強しており、学校内の日本人教師のMさんという方と仲良くしていた。当時、M先生と食事する時、こういう話を聞いた。「私は断固尖閣諸島は日本の領土である、と思っている。これは中国のみなさんと絶対違うのであろう。しかし、私たちの間、政治的立場の他に、またいろんなことがあるのであろうが、私たちは一緒に散歩して、一緒に食事して、一緒に日本語を勉強している。そこで築いた友情は政治的立場を超えられる、と思っている。」

M先生の話の通り、私たちは身の周りの友達と一緒に、いろんなことをシェアしている。それらを通して、私たちは相手の個性、感情、人格を感じ取れる。その豊富な「命」を感じた上に、共感、友情を築ける。しかし、ネットを通して、他者と喧嘩する際に、私たちは相手の性格、感情を一切感じられない。その際に、私たちにとって、相手は自分と同じように喜怒哀楽を持つ豊富な「命」ではなく、単なる抽象的、概念的な他者でしかない。そのようなドライな他者に対して、私たちの「惻隱」、「共感力」は一切発動できない。

そして、コロナ期間の人々の憎しみ、攻撃し合うことも、それと似ているかもしれない。人々は武漢人を差別し、憎む時、彼らにとって、「武漢人」というのは、恐怖、絶望に陥っている数百万の「命」ではなく、単純に疫病を自分の周りに持ってくるグループの概念的なイメージである。特に、社会休業、社交停止の政策が始まって以降、各国の人々は共に、家に閉じ込められる長い時間を過ごしたかもしれない。長時間に小さい空間に引き籠もって、生身の人とのやりとりが断絶され、人々は生氣に満ちている「命」の存在を感じられなくなり、他者は単なるテレビ、ネット上の概念的なイメージに疎外されていた。上に述べたように、概念的なイメージに対して、人々の共感、惻隱は作用しない。「命」が「概念的なイメージ」によって疎外されている世界において、だれもが他者になり、だれもが理解、同情を持ちえない。最後には、だれもが敵になる。

このような人間の疎外は決してコロナが蔓延する中のみに始まったものではない。ともすると、この疎外は人間の文明の出発点であるかもしれない。ユヴァル・ノア・ハラリ氏は『サピエンス全史』で面白い論を言及した。人間の言葉があまり発達していない時期、人間が直接接触、知り合うのは、身の回りの数十人しかない。これは、グループの人数を制限する。そして、言語という道具が発達しているため、人間は噂話、ストーリーを語るができるようになった。噂話、ストーリーの伝播にしたがって、人はより多い人と知り合うことができる。それによって、より大きなグループが形成され、より大規模の協力作業ができるようになった。しかし、自分の考えでは、噂話、ストーリーの成立によって、他者への疎外がすでに始まったのではないかと思う。生身で接触して、豊富な感情、性格を持っている元来の他者は、ストーリーの中のイメージによって疎外されている。さらに、文字の使用にしたがって、他者はもっと抽象的な概念になった。この「他者」は人間に限っているわけではない。特に近代に入ると、人間にとって、自然世界におけるすべての「命」も他者になって、疎外の対象になってしまった。野原に芽生えている木々、海に泳いでいる魚、これらのすべては資源統計上のデータにまとめられている。しかし「命」としての匂い、生氣は人間に感知されていない。その代わりに、資源の「価値」として計算されている。自然に対する疎外は、大幅に人間の認識範囲を拡大した。自然、他者への疎外によって、人間は自然、人間社会から、巨大な力、エネルギーを解放した。しかし、その代償として、人と人、人と自然の相互感知、理解は非常に薄くなっている、と考えられる。

特に、近年資本主義、消費主義の発展、ネット応用の普及に伴って、人間の疎外はさらに深刻化になっている、と考えられる。

自分の幼少期は、田舎のお婆さんの所で育てられた。お婆さんは数十羽の鶏を飼育していた。自分は鶏肉を食べたい時、お婆さんは一羽を殺して、鳥料理を作って私に食べさせた。この過程において、鶏の「命」、お婆さんの「労働」はしっかり私に実感され、私の「命」のエネルギーになった。成長した私は中国の重慶、日本の大阪、東京の学校で勉強をした。それらの大都市で生活する時、鶏肉を食べたければ、スーパーに行き、すぐを買うことができる。しかし、なんとなくスーパーの「鶏のむね」、「鶏のもも肉」からは、「命」が実感できない。買えるのは、パイプラインの製品としてのタンパク質だけである。「鶏」も、「私」も資本の生産、消費の一環によって疎外されている。

また、消費主義の宣伝も人の疎外を促進している。去年、優秀なマーケティングの影響で、中国において、あるブランドのスニーカーが大流行になっていた。そのスニーカーブームの最中、どの店でも売り切れになった。中古マーケットでは、そのスニーカーは十倍以上の値段で売られている。そのブームの中で、あまり運動しない若者も、そのスニーカーを手に入れることを求めている。そのブランドは成功的に「ファッションな若者は誰もがこのスニーカーを持たなければならない」という理念を広めた。その場合、人々はもう

履物としてのスニーカーの効用のために金を払うわけではなく、「ファッション」という作られた理念のために、金を出している。人間が製品を単に消費することより、製品の宣伝は資本が期待している人間像の構築に寄与している、と考えられる。その影響で、人々の生き方が定義され、人間の需要と供給は一律にパイプライン製品によって制限されている。それにしただがって、人間の複雑さ、多面性が失われ、個性、多様性が見えなくなる。

自分は特に産業化を反対するわけではない。ただ、資本がもたらした生産力を楽しむと同時に、自己意識の疎外に気をつけなければならない、と考えている。

また、ネットの普及にしただがって、断片化、一面的な情報が広く読み取られる傾向にある。そのような表現、情報に慣れた以上、人はもはや、複雑、多面な情報、感情を受け取れなくなる。しただがって、「命」という豊富、繊細なものと共感できなくなることも当然であろう。

それでは、この局面を打ち破る希望はどこにあるか。個人的な期待として、情報技術の発展に託したい。技術は問題をもたらすが、希望を作り出せる、とも思っている。5G、VR技術の発展にしただがって、遠距離通信はもっと豊富な情報を伝えるかもしれない。未来において、アメリカのエリートがVRを通して、中国農村の子供の生活を実感することが可能になるかもしれない。

そのほか、文芸、審美教育の普及、進歩も不可欠である。繊細な美意識、複雑な感情との共感力が発達することで、生気に満ちている「命」と響き合うことが可能になる。文芸作品を通して、人と人は普遍的な感情、生命力が実感できるのではないか。

憎しみ、対立を解消するために、人間と人間との共感、理解が欠くことが出来ない。そして、この共感を築くために、概念としての「他者」を超えて、直接に命としての「人」との繋がりを作らなければならない。この目標を目指して、国境を超え、全人類の努力が必要である。人と人がお互いに理解できる美しい世界のために、自分から、一人一人の「命」から一緒に頑張りましょう。